

# パンタナル通信

南北米福地開発協会

会報

2007年4月1日 43号

## 国際協力青年奉仕隊第七次派遣決定

オリンポにて温暖化防止のための植樹活動(07.8.21-9.7)



2005年度(第6次派遣員)レダにて

青年協力隊はこの数年、幾つかのインディヘナの村を中心とした学校建設と図書の贈呈等、教育支援活動を展開してきましたが、今年は地球環境問題に応えていける植樹活動を軸に据えることにしました。もともとレダ基地では、NPO法人「地球の緑を守る会」と提携して、この七年間、木は自然に生えるものと思っていた現地の人々が驚く、史上初めてパンタナルに植樹活動を開催し、植生を研究しながら地球緑化の実践努力をしてきました。これを活用して、もつと現地の青年達を中心に啓蒙できるよう、共に緑化活動することにより、地球温暖化対策を促進し、国際交流により、国を越えて足元からお互いが助け合うことの大切さを理解してもらうチャンスにして行ける事を期待して、私達は青年ボランティア活動を受け入れる町を探していました。

オリンポはアルト・パラグアイ州の州都とはいえ、過疎地独特の、これといった産業のない貧しい人口一五〇〇人前後の街です。しかし、この地には、小学校、中学校と共に、州では唯一の高等学校があるのが希望です。この中・高生を啓蒙することで、彼らが世界に目を向けるようになり、未来のパラグアイを生かす道を見つけてくれればと願い、まず、今年の青年ボランティア隊プランを持つて、市長、知事、学校校長等を訪問し、会談しました。(四十一号参照)

ディエゴ・リカルド・ガシャヘル市長は、二〇〇六年十一月に市長に当選した若手です。家は雑貨商を営んでいます。任期五年が始まったばかりで、やる気十分のところを年初に訪問しました。青年ボランティア隊派遣プランを紹介して、受け入れを打診したところ、市長は即座に、(次ページに続く)

是非受け入れたいと明言。我々のバイオ・プランも、地域経済活性化になると、大いに希望を持ったようです。  
「とにかく何でも言って欲しい。全面的に協力したい。」と確約してくれた青年ボランティア隊のオリンポ來訪を、大歓迎していました。

また市長は、市内にエコ・ツアーや奨励する観光事務所を開設していくプランを報告してくれました。中・高校の校長をしているロドリゲス氏は、市長の恩師であり、今は市長の政治顧問を兼任して、毎朝市庁舎に出かけて、市長はどうあるべきか、指導しているのだと笑いながら話して下さいました。

また、青年ボランティア隊プランに対するは、全面的に受け入れ、「自分の学校の生徒を必ず一緒に出来るよう約束します。」と身を乗り出して言明していました。

後日、市長からは、「是非青年ボランティア隊が来られますよう」と招請状が現地法人「南北米福地開発財団」に届きました。

募集を五月から始め、出発は八月二十一日（九月七日頃を目指して予定しています。募集要項は近々発表します。対象は十八歳以上の健康な青年男女です。（飯野記）

オリンポ市長からの招請状

南北米福地開発協会殿

二〇〇七年一月二十四日

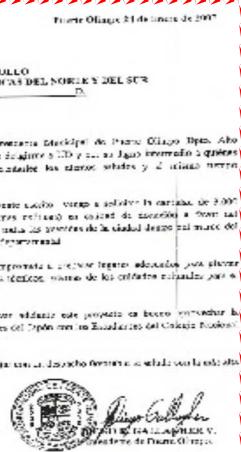
アルトパラグアイ州オリン

ポ市長という立場において、皆様に書状を差し上げられる事を光榮に思います。この書状を通して心からの挨拶を送り、また以下の事をお伝えしたいと思います。具体的には

県庁所在地の環境改善の為に、この町の全ての通りに植樹を計画している市役所に、三〇〇〇本のユーカリと松の木を植えつけること。日本から来られる学生青年の皆様とアンヘルソロン中高等学校の生徒と一緒に進めて行きたいと思

います。 オリンポ市長

植樹活動以外にも、現地の学生との文化交流、パンタナールの自然の中での釣り、乗馬、また世界遺産、イグアスの滝訪問、希少動物との触れ合いを経験できる貴重な体験ができます。



# 温帯感染症の脅

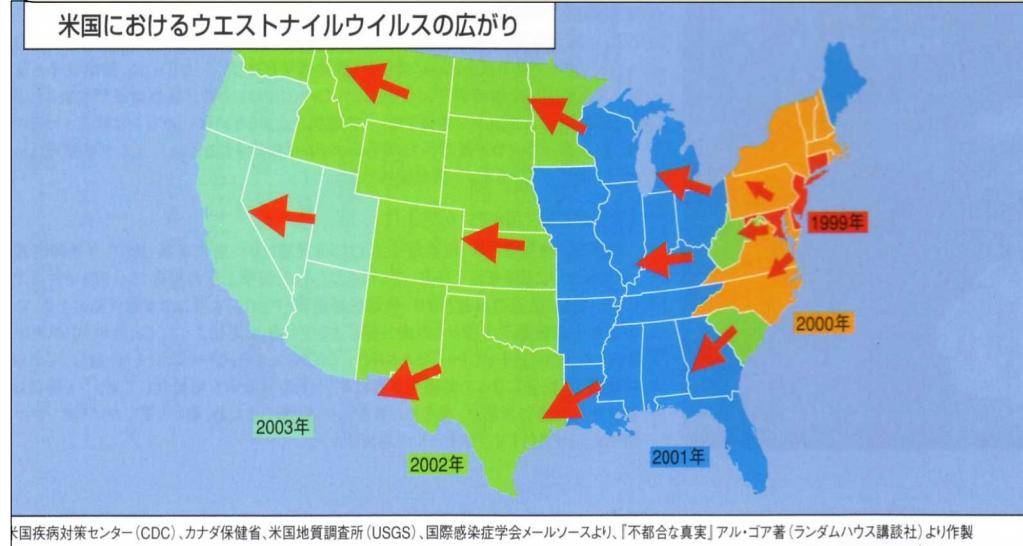
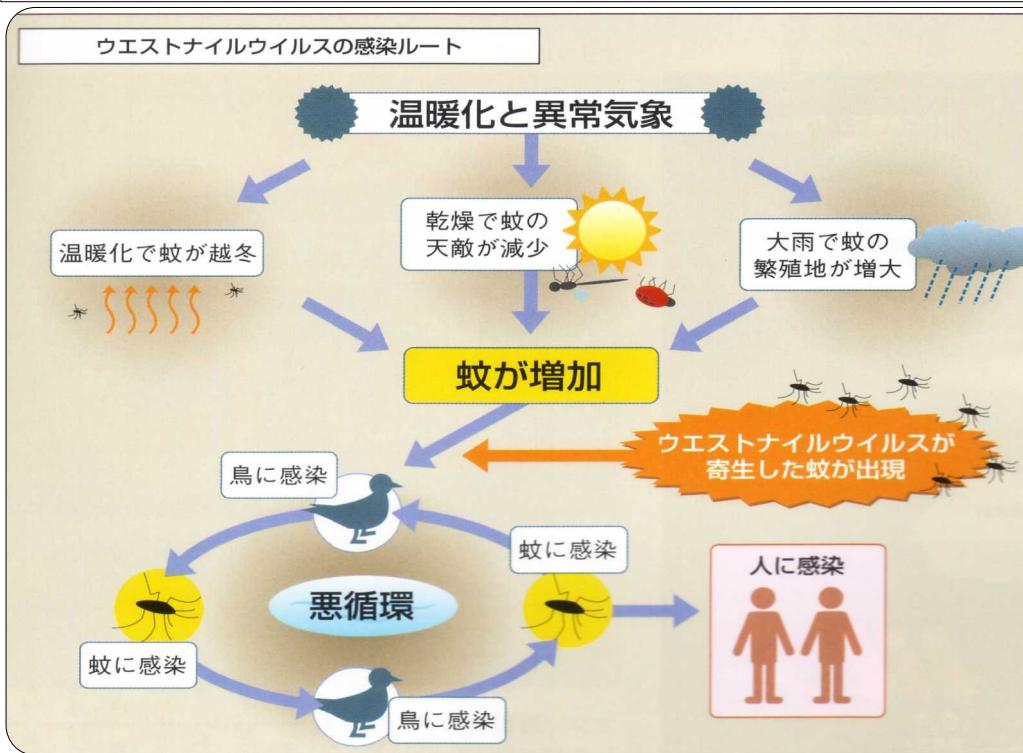
一九九九年、ウエストナイル熱が  
二ユーヨークで発症した。

地球温暖化が進めば、野生生物の生息に大きな変化が現れる。寒冷な地域に生息している動植物の生息地は確実に減少し、絶滅へと追いやられる一方、熱帯、亜熱帯に生息している動植物は生息地を拡大し、北へと広がっていくことになる。こうした生物たちの変化が新たな災禍を生み出すと危惧されている。その兆候は既に現れつつあるのだ。

一九九九年八月、二ユーヨークでそれまでアメリカに存在するはずが無いと考えられていたウエストナイル熱が発生。六十二名の発症者が確認され、そのうち六名が死に至った。そもそもウエストナイル熱は一八三七年にウガンダのウエストナイル州で初めて発見されたウエストナイルウイルスの感染によって発症する熱病で、三十九以上の高熱を発し、頭痛、筋肉痛、時には消火器疾患や発疹を伴い、死に至ることもある。アフリカの北中部も限られた地域の風土病と考えられていた。それが突如として二ユーヨークで確認されたのである。すぐにアメリカ疾病対策センター（CDC）が感染ルートを徹底調査。そこで明らかになつた媒介者はアカイ工蚊であつた。その蚊がアフリカからアメリカの飛行機に紛れ込み、アメリカ

に運ばれた蚊は繁殖し、二ユーヨークでウエストナイル熱を発症させたと結論付けられたのだ。

冬になると二ユーヨークは平均気温が氷点下を下回るため、ほとんどの蚊は死ぬはずだ。しかし温暖化により暖冬となると、下水やゴミ捨て場などの比較的暖かい場所では蚊が越冬できるようになる。こうした蚊が春にいつせいに卵を産む事で、蚊の数が急増する。（地球の真実より 宝島社）



米国疾病対策センター(CDC)、カナダ保健省、米国地質調査所(USGS)、国際感染症学会メールソースより、「不都合な真実」アル・ゴア著(ランダムハウス講談社)より作製

現在、アメリカの元副大統領アル・ゴアによる『不都合な真実』と題する本とそれを元にした映画が日本でも出版、上映されています。温暖化による地球の危機を訴えて、反響を与えています。是非、本の一読、映画の鑑賞を推薦します。（柴沼沼）

# ジャトロファの研究の為

会社訪問 報告(伊達記)

三月十九日の午後、品川の駅前の品川インター・シティーのビル内に事務所のある日本植物燃料株式会社(NBF)を訪れ、海外営業部の十時氏に柴沼先生、林先生と共に二時間ほど話を聞きました。

スリランカで四十ヘクタール程の土地に、インドのジャトロファの種を使った栽培を行つてゐる。そこでは、バイオディーゼルを輸出できないので、大型栽培の研究が主な目的である。二年前から栽培。長年コーヒー栽培の経験者の日本人が栽培の担当を行つてゐる。

日本では遺伝子組み換えで、乾燥に強い種を作ること、砂漠地でも種から油がとれるよう研究中。また新種改良をなし油の多く取れる新種を造るため、色々な国からジャトロファの種を集めているとの事。挿し木は、根の成長を促す培養液を使うことで、三ヶ月で実がなる木を育てる事も可能なようだ。ただし、種の質がどうなるか検査する必要あり。現在、インドネシアで大きく栽培できる場所を探している。そこで、一〇〇〇ヘクタール規模の生産をして、日本に輸出したいと考えている。

ジャトロファという毒性を持つが、口に入れない限り問題ないし、高温に弱いので油の精製過程で毒性は無くなる。油の窄油機は、既存のものを使つてゐるが、ジャトロファ専用の窄油機を三重にある工場で研究中。製油については、炭化水素化という新しい製油方法を開発中で、阿蘇に研究所を作つて行つてゐる。一〇一〇年ぐらいをめどにしている。固形触媒を使えるようになれば、水洗いの必要がなく汚染の心配もなくなる。ヨーロッパでその研究が進んでいる。

一時的なブームでの栽培でなく、事実に即し、着実に進めて行く必要性を感じた。

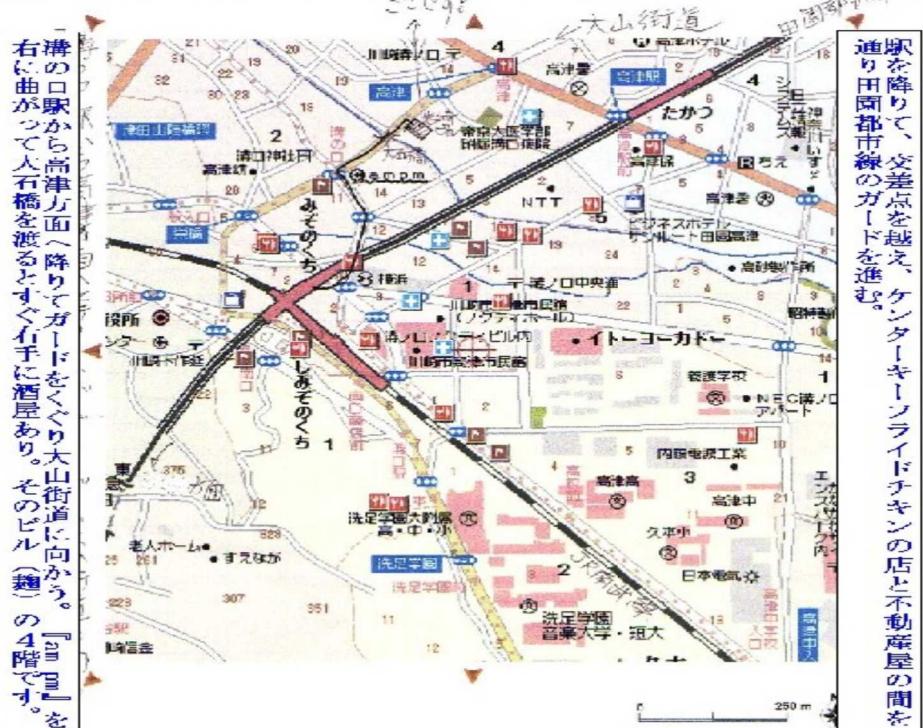


## 会員募集中

一緒にパンタナールの保全と地球環境を改善して行きましょう。  
会費 月 500円  
年間 6000円  
毎月、「パンタナール通信」を送付



事務局にはレグの歴史をはじめ開発状況、そして地球温暖化を含む環境保全に対するビデオ、本を揃えております。是非、何時でもお訪ねください。



## 第五回ピースライフセミナーご案内

南北米福地開発協会 事務局

〒二二三一〇〇一

神奈川県川崎市高津区

溝口三一十一十五

行つてゐる。一〇一〇年ぐらいをめどにしている。固形触媒

を使えるようになれば、水洗いの必要がなく汚染の心配もな

くなる。ヨーロッパでその研究が進んでいる。

一時的なブームでの栽培でなく、事実に即し、着実に

進めて行く必要性を感じた。

詳しくは事務局にお尋ねください。  
南北米福地開発協会主催

Fax 電話 ○四四一八一九一一八二一〇  
会費納入 郵便口座

一〇一八〇一七七六八〇四七一

代表 柴沼邦彦